

備えられた道

山本

悦子

生い立ち

一九四四年一〇月二七日、茨城県真壁郡黒子村(現在の筑西市)に八人兄弟の四女として出生。兄二人、姉三人、妹二人、両親、私と一〇人家族の賑やかで楽しい、心豊かな少女時代を過ごしました。

兄弟の中でも下の方なので、両親はじめ、兄や姉の存在は大きく、全員私のお手本であり、教師でした。成長と共に、妹達からも多くを学ぶと言う贅沢な環境の中で、天真爛漫に家族の愛の中で伸び伸びと、明るく元気にすごしたのです。

そんな呑気な少女が、やがて牧師になるなど、誰が思ったでしょう。誰が考えたでしょう。その道のりを辿ることにします。

イエス様との出会い

小学校四年生の時、近くの会館に宣教師が来ると言うので、外人を見る物珍しさもあり、近所の子供達と出かけました。宣教師がたどたどしくカタコトで話す日本語に、子供心に感動したのを覚えています。集会は休まずに出席し、ある日、紙芝居で大の男のペテロが

イエス様を裏切り、門の外に出て号泣している場面を見て、「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ」との思いが伝わり、そのあとで、このペテロを赦すイエス様のまなざしに、再び感動しました。この物語は子供ごろの奥深くに浸み込んでいきました。

仕事

就職のために上京したのは一九六〇年春でした。同時に高校の通信教育を受け、熱心に勉強に励み、四年後さらに勉強がたくて、職場を離れ、村田簿記に、虎ノ門タイピスト学校に通い、空いた時間を、洋裁、編物教室に通い、充実した毎日を送りました。

新しい仕事は写植という、当時としては印刷業界に新風を巻き起こした新技術でした。私はこの仕事を愛し、将来は独立してビルを建てる位の力の入れようでした。社長も「この仕事はあなたにとって天職ですよ」とまで言ってくれました。

受洗

その頃、職場の先輩に誘われて一九六三年、聖徒教会の礼拝に出席しました。

この日は母の日礼拝であり、昔懐かしい教会への出席に涙がこぼれる程嬉しかったのを記憶しています。この日以来、私の礼拝出席は休むことなく、その年の軽井沢夏期修養会に参加、先輩姉の迫力のある証しに打ちのめされました。こんなにも世の人のために働いて、時間を、財を、労力を、献げておられるのを知り、私もかくありたいと願ひ、一九六三年八月八日、軽井沢で洗礼を受けました。

その後も順調に、教会生活、職場生活、勉強にと、自分のやりたいことをこなしていきましました。

職員（献身）の召命

そんなある日、とてつもない事が起きました。聖徒教会の吉田牧師より、教会職員へのおすすめがあったのです。

青天の霹靂と思えることでした。何もかも順調で、これからは少し親孝行も出来るかなと思っていたところでした。満ち足りた毎日に、なぜ私のようなものに職員への声がかかったのか、他に適した方がおられるだろうにと、頭の中がぐるぐる廻り始めました。

職員（献身者）は、生涯独身であること、家族に責任がないこと、家族との交流も控える

ことが決められていました。

私にはとてもそんなことは出来ない、辞退するのが一番と思いつつも頭から離れず悩み苦しみました。

今の生活は、それは楽しい充実してきた日々です。これと決別することです。二〇歳そこそこで、これからどんなバラ色の人生があるかも知れないのです。まだまだ勉強したいことややりたいことが山程あるのです。

職員になるべきか否かで悩み、泣き明かした結果、私は晴れ晴れとした思いで牧師館を訪ねました。牧師に献身の決意を表明すると、牧師は満面笑みをうかべて私の決心を喜んで下さったのです。

教会職員として

職員の生活はこの世のバラ色人生に勝る珠玉の年月でした。五人の姉妹は、朝夕の礼拝を守り、それぞれ与えられた仕事に従事します。私に与えられた仕事は、主に印刷でした。が会計の仕事もいくつか責任を持ちました。何と、それまで学んだ簿記もタイプも写植も一〇〇%生かして用いられたのです。

若い娘が、汗と油とインキにまみれている姿はどう見ても幸福な姿ではありませんが、持ち前の呑気な性格はそれをやっつてのけました。

その頃、両親は私の結婚をどれほど望んでいたかを後で知りました。子供には幸せな家庭生活を送ってほしいと願う親心です。しかし献身の道を選んだ私の自由を阻むことなく、理解し見守ってくれた両親、そして兄弟たちでした。私は思うままに、好きな人生を歩むことができたのです。

結婚

生涯独身で献身の道を貫くことが自分に与えられた人生と自他共に認めて進んでいた時、何と結婚という出来事が起きたのです。

彼は簿記学校の友人で、親戚には隅谷三喜男教授もおりキリスト教に無縁ではありません。結婚しない、生涯独身を貫くことが私の道であると心得ていました。しかし、この結婚が私を大きく羽ばたかせたのです。

一九七五年に結婚。その頃教会は大変な問題をかかえており、私は牧師と共に教会を出ることになりました。毎日のように、目黒から神奈川県大和に出かけ、指導を仰ぎ、牧師

の家庭を支えるために、数名の者が働きました。

家を留守がちにする私を夫は理解し、私がしたい様にさせてくれたのです。このことから始まり、現在に至る迄どれ程私を守り助けてくれたことでしょうか。郷里茨城にセカンドハウスを購入したこと、その家で教会を立ち上げたこと、教会堂建設、献堂式、神学校の学び、牧師就任式、教えきれない程の協力を惜しみなく助けてくれました。夫なくしてこれらのことは実現しなかったことです。

朝 禱 会

二〇年前、友人の強い奨めで青山朝禱会に出席。先輩諸兄妹の祈る姿に打たれ、全国大会、ブロック大会と出席する恵みを与えられました。札幌、小樽、函館、仙台、新潟、東京、埼玉、湯河原、静岡、名古屋、大阪、大津、熊本、長崎。関東ブロックも四四カ所を訪ねることが出来ました。この経験が下妻朝禱会発足につながりました。

一〇年前、下妻朝禱会が発足し、今回は一三八回を迎えます。茨城に朝禱会が誕生するなど夢想だにしなかったことです。

聖霊に押し出されてここまで来ました。もうこれでいいのでしょうか。大人しく与えられ

た奉仕に専念することである。するとどうでしょう。主は更に新たなことを命じられるのではありませんか。

アシユラム

一〇年前、常磐アシユラムに参加し、茨城の骨太の信仰者と交わり、次第に教職アシユラム、京浜アシユラム、オリーブの里アシユラム、関東アシユラム(箱根)年頭集会にも参加。

茨城の常磐アシユラムがオリーブの里に移り、常磐は発展的解消となりました。シャローム教会でアシユラムの集会が出来ないものかと祈っていました。榎本恵先生に相談すると受入れられ、何と来年二〇一九年三月二一日に発足となりました。

七四歳で新しいことを始めるとは、少し頭がおかしいのではと思われましょう。主の命令を断つてはなりませんと、信仰の友は励まして押してくれます。

「アブラハムは、ハランを出発したとき七五歳であった」創世記一二章四節

主はこの後も何をお命じになられるのか分かりません。「ハイ」と答えるのみです。

病気に縁のない私でしたがここ数年、考えられないような故障が次々と起き、人生の最

終章に入ります。飛び歩いた日々が懐かしい。

早く、完全に、効率よく、立ち止まらない人でした。まっしぐらに進んだ年月でしたが、気がつくとは体はボロボロに、パーツはすり減り、悲鳴をあげています。今は立ちどまり状態です、体力の衰えを素直に受け入れ、体に相談し歳相応に主に従っていきます。

エピソード

一九四四年出生より今日迄、呑気な私を主は忍耐をもって導き、育んで下さいました。小さな家の教会から始まり、次々に上地や家が与えられ、なんと会堂建設へと導かれました。冷静に考えると、ゾツとして大それたことをしたものと恐れおののいています。もつと驚いたことは私が牧師になったことです。逃げ腰になっていると、親身になって熱心に祈ってくださいる方があり、踏み出す事ができました。

負い切れない悩みや問題はあります。しかし、私には尊い祈りの友、信仰の戦友がいて、助け導いてくださいます。感謝の他ありません。

『そればかりでなく、苦難をも誇りとします。私たちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、伝達は希望を生むということを』ローマ信徒への手紙五章三節

愛唱聖句

*創世記一章一節

初めに、神は天地を想像した。

*イザヤ五三章五節

彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。

*マルコ一〇章二七節

人間にできることではないが、神にはできる。

愛唱賛美歌

*讚美歌二六七

神はわがやぐら わが強き盾

*讚美歌四九四

わが行く道 いついかに